

平成 21 年 3 月 31 日現在

研究種目：基盤研究(S)

研究期間：2004 年度～2008 年度

課題番号：16102002

研究課題名(和文) 歴史的視角から分析する東アジアの都市問題と環境問題

研究課題名(英文) The Urban Environmental Management in the East Asia from the Point of Historical Analysis

研究代表者

妹尾達彦 (SEO TATSUHIKO)

中央大学・文学部・教授

研究者番号：20163074

研究成果の概要：

5 年間の研究成果は、(1)公刊した研究成果として、研究代表者・研究分担者の論著約 150 篇、(2)規模の大きな公開の国際会議の開催が 4 回(2005 年 3 月東京・2005 年 10 月京都・2006 年 3 月西安・2009 年 3 月東京)、(3)研究成果報告会が約 50 回を数えた。これらの成果の中核部分は、本研究組織の学術誌『都市と環境の歴史学』第 1 集～第 4 集(2006 年 3 月、2009 年 3 月、同年 4 月刊行予定)に収録されている。本研究によって、現在の人類が直面する都市と環境の問題に立脚した歴史解釈の道が拓け、その結果、従来の歴史学の枠組みを超えて、人類史という、今求められている大きな分析枠組みの設定と歴史解釈を行うことが可能になった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2004 年度	24,600,000	7,380,000	31,980,000
2005 年度	15,900,000	4,770,000	20,670,000
2006 年度	13,700,000	4,110,000	17,810,000
2007 年度	14,300,000	4,290,000	18,590,000
2008 年度	14,100,000	4,230,000	18,330,000
総計	82,600,000	24,780,000	107,380,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学 東洋史

キーワード：都市・環境・歴史・黄土高原・農牧複合地帯・沿海地帯・環境遷移帯

## 1. 研究開始当初の背景

研究開始当初の研究状況をかえりみると、現代に生きる私たちの関心に即した歴史学が人々に強く求められていながらも、その要求に実際の研究が追いついていない状況だったといえる。

すなわち、現代の都市問題や環境問題に立脚する新しい歴史学が求められながらも、その要求を満たす研究は、まだ模索途上であった。とくにアジア史研究の分野では、欧米史研究や日本史研究に比べて、都市と環境を鍵概念とする研究は相対的に進展しておらず、

専門家をふくむ多くの人々によって、早急な研究の進展が求められていた。

本研究は、このような研究状況をふまえて、都市問題と環境問題に揺れる現代人の関心に即した、現代にふさわしい新しい歴史学をつくりあげるためにスタートした。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、歴史学の視角から、東アジアの都市と生態環境の相関関係を分析することで、現在の地球が直面する都市問題と環境問題の歴史的背景を探ることであり、都市と環境を鍵概念として、地球における人類の歴史を明らかにすることである。

この研究目的のために、本研究は、空間的には、東アジア（中国大陸・中央アジア東部・東北アジア・朝鮮半島・日本列島）を分析の対象とし、時間的には、紀元前 2000 年紀の都市と国家の誕生期から、21 世紀の現在に至る長い時間帯の中で、都市と環境の歴史を系統的に分析する。

このことによって、従来、現代の状況分析を主とする環境問題の研究で抜け落ちていた、東アジアの都市問題と環境問題の歴史的経過を、人類の長い歴史の中で体系的に明らかにすることを目指している。

限られた研究期間の中で最大の成果を挙げるために、本研究では、東アジアの都城や大都市の立地した地域の生態環境の変遷に論点を絞って分析した。

この作業によって、今日の近代国家の首都や大都市がかかえる都市問題や環境問題の来歴を明らかにすることができ、都市と環境の歴史にもとづく人類史の叙述が可能となるだろう。

## 3. 研究の方法

本共同研究がとった方法は、(1)文理融合型の研究組織をつくることと、(2)各研究分担者の責任を明確化し、相互の不断の交流を促進することによって、学問融合にもとづく人類史の包括的な仮説を提示することである。

### (1)文理融合型の研究組織

研究組織を構成する際に、海外研究協力者をふくめて、各分野を代表する、文献史学・環境学・自然地理学・人文地理学・考古学・

建築学等の多分野の研究者に集まっていた、各自の専門分野と分析方法をふまえた上で、都市と環境の歴史という共通のテーマを分析する方法をとった。

出身地域も、学問経歴も、研究方法も、それぞれ異なる研究者たちが、たがいの専門領域にもとづいて、都市と環境に重点をおく人類史の構築という一つの共通のテーマを競い合って分析する研究環境は、異なる専門間の「共通言語」をつくりだす力を必然的に各研究者に生じさせ、新しい歴史認識を生み出した。

### (2)責任の明確化と不断の交流

研究組織を効率的に運営し、責任を明確化するために、各研究者の研究の分担を専門地域によって分け（中国大陸・中央アジア・東アジア沿海地帯・朝鮮半島・日本列島）、専門地域ごとに競争し合いながら成果を公開することを心がけた。同時に、自らの専門地域を調査する際には、他地域の専門家と共同で調査することを義務づけ、毎年の実地調査を、研究者間の討議と交流の最重要の場とした。このことによって、研究課題についての共通の認識をつくりあげることができた。

## 4. 研究成果

5 年間の研究の成果は、本研究によって、現在の人類が直面する都市と環境の問題に立脚した歴史の解釈の道が拓け、その結果、従来の歴史学の枠組みを超えて、人類史という、より大きな分析枠組みの設定と歴史解釈が可能になった点である。

研究代表者をはじめ、研究分担者・海外共同研究者が公刊した研究成果によって、主として以下の 2 つの仮説が提示され、各研究者によって多角的に検証された。

すなわち、(1)同じ環境と異なる環境の組み合わせによって歴史が展開するという仮説と、(2)歴史の主要舞台は環境の境域に立地し、その環境の境域は、前近代の農業遊牧複合地帯から近代の沿海地帯に移行するという仮説の提示とその検証である。

この作業によって、現代の都市問題と環境問題が、農牧複合地帯から沿海地帯へと歴史が拡大していく過程で必然的に生じた点も明らかになった。

共同研究が生み出した以上の2つの仮説によって、人類史の系統的な理解が可能となる点について、さらに説明を加えたい。

(1) 第1の仮説：歴史は、同じ環境と異なる環境の組み合わせによって展開する。

すなわち、前近代におけるアフロ・ユーラシア大陸の各地域の歴史は、技術の未発達等によって、各地域の生態環境と分かちがたく結びついてきた。大局的にいえば、前近代のアフロ・ユーラシア大陸では、異なる環境と生業をもつ緯度の異なる南北の地域を結ぶ物流と、環境と生業を同じくする同緯度地域を結ぶ東西の物流とが連動することで、歴史の全体構造をつくっていた。

前近代のアフロ・ユーラシア大陸においては、生業は環境によって決定され、異なる生業間の物産の流通こそが物流の根幹をなし、環境と生業を同じくする同緯度地域間の流通が、それを補う役割を演じたのである。

このような物産の流通は、人間と環境の不可分の関係を前提としている。この状況のもとでは、人間活動は環境に即応することで初めて可能となり、現在見られるような都市問題や環境問題は、まだ顕在化していない。

(2) 第2の仮説：歴史の主要舞台は環境の境域に立地し、その環境の境域は、前近代の農業・遊牧複合地帯から近代の沿海地帯に移行する。

第1の仮説にもとづく、アフロ・ユーラシア大陸の政治・経済・軍事の中核地域は、生態環境の境域の都市網に立地する。環境の境域こそが、物流の要となるためである。

この第1の仮説から導き出される第2の仮説は、アフロ・ユーラシア大陸の政治・経済・軍事の中核地域が、前近代の農牧複合地帯（農耕地域と遊牧地域が複合する地帯）に接する都市網から、近代の沿海地帯に接する都市網へと転換する点である。

この転換は、アフロ・ユーラシア大陸における交通幹線が、陸路から水路に転換し始める9世紀前後に始まり、18、19世紀にかけて頂点に達し、人類の政治・経済・社会・文化制度の全体にかかわる変革をもたらした。

その変革とは、(1)商品流通の飛躍的増加と国家の財政規模の拡大、(2)商品品目の大衆化と社会の世俗化、(3)消費が生産を決定

する社会から生産が消費を決定する社会への転換、(4)生態環境に依拠した交易から生態環境を超越する交易への転換であり、(5)人間の行動の主体化（伝統にもとづく行動様式から自発的な行動様式に転換）である。

要するに、地球に近代社会が形成される際に、沿海地帯に接する都市網の形成は、決定的な意味をもっていた。そして、農牧複合地帯から沿海地帯への移行は、アフロ・ユーラシア大陸の全域で、ほぼ同時に進展した。

ここで重要な点は、環境問題や都市問題が生まれ、その問題を認識する前提となる人間の主体化の進展は、このような歴史の舞台の転換に対応している点である。

要するに、現代の都市問題や環境問題は、政治・経済・文化の全体が絡み合う人類史の必然の結果であり、都市問題や環境問題の存在しない時代に回帰することは、今や現実的に不可能である。問題の顕在化しなかった「良き時代」を懐古するのではなく、人類史そのものが都市環境問題を生み出した事実をふまえて、問題への対処法を総合的に探る他ないのである。

以上の歴史解釈は、アフロ・ユーラシア大陸の各地域の歴史が、同じ構造をもつことを主張する。この見方にたてば、従来の一つの地域を絶対視しがちな見方、たとえば、西欧史や中国史に収斂される世界史観や、農業地域と遊牧地域、陸の歴史と海域の歴史等の二項対立を強調する歴史観を相対化することができる。そして、各地域を平等に比較して関係づけることで、人類史の叙述が可能となるのである。

このように、世界が共通して直面する現実に立脚して世界の成り立ちを分析することで、国境を超えた人類共通の歴史認識の構築が可能となる。同時に、都市と環境の歴史学は、われわれに、自分の暮らす地域の特色と意義を再認識させ、人類の一員であることを共通に自覚させるのである。

この意味において、都市と環境の歴史を鍵概念とする本研究は、21世紀の地球に求められる歴史学の構築をめざしたものであり、今後の歴史学の一つの指針をしめすものといえよう。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 27 件)

- (1) 新免康 『『ターリーヒ・ラシーディー』テュルク語訳附編の叙述傾向に関する一考察ーカシュガルの歴代ハーキム・ベグの部分を中心にー』『西南アジア研究』70、2009年、査読有(印刷中)。
- (2) 妹尾達彦 「北京の小さな橋ー街角のグローバルヒストリーー」『国立民族学博物館調査報告 Senri Ethnological Reports』81、95-183頁、2009年、査読無。
- (3) 妹尾達彦 「中国都城の方格状街割の沿革」『都城制研究(3)』奈良女子大学 21世紀 COEプログラム古代日本形成の特質解明の研究教育拠点、71-86頁、2009年、査読無。
- (4) 妹尾達彦 「中国都城の沿革と中国都市図の変遷ー呂大防「唐長安城図」の分析を中心にしてー」舘野和己編『古代都城のかたちー空間・制度・思想ー』東京・同成社、176-202頁、2009年、査読無。
- (5) 新免康 「中国新疆のオアシス都市ヤルカンドとイスラーム聖者廟(マザール)」妹尾達彦編『都市と環境の歴史学 第4集』243-254頁、2009年、査読無。
- (6) 新免康 「中国新疆のウルムチ(烏魯木齊)市の歴史の変遷」妹尾達彦編『都市と環境の歴史学 第2集〔増補版〕』169-202頁、2009年、査読無。
- (7) 新宮学 「近世中国における皇城の成立」妹尾達彦編『都市と環境の歴史学 第4集』255-293頁、2009年、査読無。
- (8) 新宮学 「北京遷都研究の現状と課題」妹尾達彦編『都市と環境の歴史学 第2集〔増補版〕』141-164頁、2009年、査読無。
- (9) 新宮学 「明代中都皇城考」『集刊東洋学』100、206-228頁、2009年、査読有。
- (10) 田中俊明 「高句麗長安城の築造と遷都」妹尾達彦編『都市と環境の歴史学 第4集』417-436頁、2009年、査読無。
- (11) 田中俊明 「朝鮮古代都城と中国都城」妹尾達彦編『都市と環境の歴史学 第2集〔増補版〕』485-505頁、2009年、査読無。
- (12) 橋本義則 「東アジア比較都城史の試みー東亜比較都城史研究会 5年の歩み」妹尾達彦編『都市と環境の歴史学 第4集』498-522頁、2009年、査読無。
- (13) 橋本義則 「日本古代宮都の構造と皇権ー大皇宮・太上天皇宮・後宮ー」妹尾達彦編『都市と環境の歴史学 第2集〔増補版〕』579-624頁、2009年、査読無。
- (14) 妹尾達彦 「中国歴代都市図の變遷ー 이미지와 현실ー」『東亜文化』46、ソウル大学東亜文化研究所、105-134頁、2008年、査読有。
- (15) 妹尾達彦 「円仁の長安ー9世紀の中国都城と王権儀礼ー」『中央大学文学部紀要 史学』53、17-76頁、2008年、査読無。
- (16) 田中俊明 「朝鮮三国王都の変遷」王維坤・宇野隆夫編『古代東アジア交流の総合的研究』国際日本文化研究センター共同研究報告書、417-436頁、2008年、査読有。
- (17) 田中俊明 「魏の東方経略をめぐる問題点」『古代武器研究』9、6-15頁、2008年、査読有。
- (18) 妹尾達彦 「歴史の風：都市と環境の歴史学ー黄土高原にー」『史学雑誌』116-9、38-40頁、2007年、査読有。
- (19) 妹尾達彦 「世界史の時期区分と唐宋変革論」『中央大学文学部紀要 史学』52、19-68頁、2007年、査読無。
- (20) 妹尾達彦 「韓愈与長安ー9世紀的転型ー」『唐史研究論集』9、三秦出版社、1-28頁、2007年、査読無。
- (21) 新免康・河原弥生(共著)「ブズルグ・ハーン・トラとカッタ・ケナガス村の墓廟」澤田稔編『シルクロード学研究(シルクロード学研究センター紀要)：中央アジアのイスラーム聖地ーフェルガナ盆地とカシュガル地方ー』28、79-100頁、2007年、査読有。
- (22) 田中俊明 「高句麗平壤都城と王宮城」『馬韓・百濟文化』17、59-82頁、2007年、査読無。
- (23) 妹尾達彦 「都の立地ー中国の事例ー」『中央大学人文科学研究所紀要』58、143-171頁、2006年、査読無。
- (24) 妹尾達彦 「宋代史研究の最前線に接して」『宋代社会の空間とコミュニケーション』汲古書院、351-366頁、2006年、査読無。
- (25) 妹尾達彦 「農業ー遊牧境界地帯与隋唐長安城ー」『中國史研究』40、韓国中

国史学会、105-130 頁、2006 年、査読有。

(26)妹尾達彦「九世紀的転型—以白居易為例—」『唐研究』13、493-532 頁、2005 年、査読有。

(27)妹尾達彦「固有なのか、普遍なのか？—隋唐長安城の建築構造と社会構造—」『年報都市史研究』13、山川出版社、9-26 頁、2005 年、査読有。

〔学会発表〕(計 14 件)

(1)妹尾達彦「都市と環境の歴史学」、基盤研究(S) 国際会議、2009 年 3 月 15 日、中央大学駿河台記念館。

(2)田中俊明「高句麗長安城の築造と遷都」同上、3 月 15 日。

(3)橋本義則「東アジア比較都城史の試み—東亜比較都城史研究会 5 年の歩み」同上。

(4)新免康「中国新疆のオアシス都市ヤルカンドとイスラーム聖者廟(マザール)」、同上、3 月 14 日。

(5)新宮学「近世中国における皇城の成立」同上。

(6)妹尾達彦「呂大防「長安図」的世界認識」空間新思维—歴史輿図学国際學術研討会、2008 年 11 月 7 日、台北・故宮博物院。

(7)妹尾達彦「唐代長安の東市と西市」、丝路胡人暨唐代中外文化交流學術討論会、2008 年 10 月 10 日、西安・乾陵博物館。

(8)妹尾達彦「中国歴代都市図의 変遷—이미지와 현실—」韓国東北アジア歴史地図国際会議、2007 年 11 月 30 日、ソウル大学奎章閣。

(9)妹尾達彦「近代日本の都市史と建築史」紀念劉敦楨先生誕辰 110 周年暨中国建築史学史專題研討会、2007 年 10 月 21 日、南京・東南大学建築学院。

(10)妹尾達彦「都城と王権儀礼—根拠中国歴代都城復原図—」第 3 届中国史学会国際会議、2007 年 9 月 7 日、台北・政治大学。

(11)妹尾達彦「唐長安城的城市結構」隋唐長安歴史地理問題學術討論会、2007 年 3 月 17 日、西安・陝西師範大学。

(12)新宮学「明清北京城市研究」同上。

(13)橋本義則「日本古代後期的都城—從平城京到長岡京、平安京—」同上。

(14)田中俊明「遼東郡の変遷」基盤研究(S) 国際会議、2005 年 10 月 30 日、コンソーシウム京都。

〔図書〕(計 26 件)

〔単著〕

(1)妹尾達彦編、中央大学文学部東洋史学研究室、『都市と環境の歴史学 第 1 集〔増補版〕』2009 年 4 月刊行予定、507 頁。

(2)妹尾達彦編、中央大学文学部東洋史学研究室、『都市と環境の歴史学 第 3 集〔増補版〕』2009 年 4 月刊行予定、430 頁。

(3)妹尾達彦編、中央大学文学部東洋史学研究室、『都市と環境の歴史学 第 2 集〔増補版〕』2009 年、647 頁。

(4)妹尾達彦編、中央大学文学部東洋史学研究室、『都市と環境の歴史学 第 4 集』2009 年、557 頁。

(5)田中俊明、山川出版社、『古代の日本と加耶』2009 年、106 頁。

(6)妹尾達彦著、崔宰榮訳、韓国・ゴールデンバフ社、『長安の都市計画』2006 年、284 頁。

〔共著〕

(1)妹尾達彦、土肥義和編、財団法人東洋文庫、『敦煌・吐魯番出土漢文文書の新研究』、2009 年、427-446 頁(総 489 頁)。

(2)妹尾達彦、大津透編、山川出版社、『史学会シンポジウム叢書 日唐律令比較研究の新段階』2008 年、97-118 頁(総 275 頁)。

(3)妹尾達彦、黄寛重編、国立政治大学歴史学系他、『基調と変奏—七至二十世紀的中国—①』、2008 年、71-99 頁(総 389 頁)。

(4)妹尾達彦、田村晃一編、동북아역사재단、『동아시아의 도성과 발해(東アジアの都城と渤海)』2008 年、101-157 頁(総 570 頁)。

(5)新免康、堀直他共編、NIHU プログラム「イスラーム地域研究」東京大学拠点、『「ターリーヒ・ラシーディー」テュルク語訳附編の研究』2008 年、xi+372+171 頁。

(6)田中俊明、菅谷文則編、同成社、『王権と武器と信仰』2008 年、820-830 頁(総 1103 頁)。

(7)妹尾達彦、秋山元秀他編、朝倉書店、『アジアの歴史地理 2 都市と農地景観』2007 年、13-26 頁(総 366 頁)。

(8)妹尾達彦、中国社会科学院考古研究所・西安大明宮遺址保護領導小組編、文物出版社、『大明宮遺址考古發現与研究』2007 年、303-309 頁(総 463 頁+図版・付図 124 頁)。

(9)妹尾達彦、大阪市立大学重点研究 COE プログラム編『中国の王権と都市—比較史の観点から—』2007 年、5-43 頁(総 135 頁)。

(10)新宮学、山根幸夫教授追悼記念論叢刊行会編、『明代中国の歴史的位相—山根幸夫教授追悼記念論叢(上)』汲古書院、2007年、23-43頁(総664頁)。

(11)田中俊明、国立慶州博物館・奈良県立橿原考古学研究所編『韓半島の青銅器製作技術と東アジアの古鏡』2007年、277-318頁(総339頁)。

(12)田中俊明、枚方市教育委員会編『百済の歴史と文化—公州篇—』2007年、7-28頁(総49頁)。

(13)妹尾達彦、溝口雄三・小島毅主編、江蘇人民出版社、『中国的思惟世界』2006年、466-498頁(総657頁)。

(14)妹尾達彦、東京大学出版会、鈴木博之他編『シリーズ都市・建築・歴史1 記念的建造物の成立』2006年、151-222頁(総390頁)。

(15)橋本義則、東京大学出版会、鈴木博之他編『シリーズ都市・建築・歴史1 記念的建造物の成立』2006年、15-83頁(総390頁)。

(16)妹尾達彦、NHK出版社、『NHKスペシャル 新シルクロード5 カシュガル・西安』2005年、200-215頁(総277頁)。

(17)妹尾達彦・石見清裕(共著)、礪波護他編、名古屋大学出版会、『中国史研究入門』、2005年、100-126頁、388-396頁(総467頁)。

(18)新宮学、東京大学出版会、鈴木博之他編『シリーズ都市・建築・歴史5 近世都市の成立』2005年、375-410頁(総409頁)。

(19)新免康、末成道男・曾士才編『〈講座・世界の先住民族—ファースト・ピープルズの現在〉01 東アジア』明石書店、2005年、127-151頁(総406頁)。

(20)新免康・王建新(共著)、加藤博編、『イスラーム地域研究叢書6:イスラームの性と文化』、東京大学出版会、2005年、127-151頁(総320頁)。

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

妹尾 達彦(SEO TATSUHIKO)

中央大学・文学部・教授

研究者番号:20163074

### (2)研究分担者

新免 康 (SHINMEN YASUSHI)

中央大学・文学部・教授

研究者番号:10235781

新宮 学 (ARAMIYA MANABU)

山形大学・人文学部・教授

研究者番号:30162481

田中 俊明 (TANAKA TOSHIAKI)

滋賀県立大学・人間文化学部・教授

研究者番号:50183067

橋本 義則 (HASHIMOTO YOSHINORI)

山口大学・人文学部・教授

研究者番号:60164802

### (3)海外研究協力者

李 孝聡 (LI XIACONG)

北京大学・中国古代史研究中心・教授

辛 德勇 (XING DEYONG)

北京大学・中国古代史研究中心・教授

荣 新江 (RONG XINGJIANG)

北京大学・中国古代史研究中心・教授

韓 茂莉 (HAN MAOLI)

北京大学・城市環境学系・教授

侯 甬堅 (HOU YONGJIAN)

陝西師範大学・西北歴史環境与経済社会発展研究中心・所長

朱士光 (ZHU SHIGUANG)

陝西師範大学・西北歴史環境経済社会発展研究中心・教授

張 萍 (ZHANG PING)

陝西師範大学西北歴史環境与経済社会発展研究中心研究員

張 建林 (ZHANG JIANLIN)

陝西省考古研究院・副院长

桑 広書 (SANG GUANGSHU)

浙江師範大学・旅游与資源管理学院・副教授

呉 宏岐 (WU HONGQI)

暨南大学・歴史学系・教授

朴 漢濟 (PARK HANJE)

ソウル大学・東洋史学科・教授

陳 弱水 (CHEN JOSHUI)

台湾大学・歴史学系・教授

黄 寛重 (HUANG KUANCHUNG)

台湾中央研究院歴史語言研究院・教授

McDermott, J.P.

ケンブリッジ大学・東アジア学科・フェロ

ー